

2 研究の実際

(1) 教科横断的な高等学校国語科の学習指導について

ア 次期学習指導要領に向けた動きから

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」⁽¹⁾（以下「審議のまとめ」）では以下のように述べられています。

こうした組織体制のもと、これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科等横断的な視点に立った学習が重要であり、各教科等における学習の充実のもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める必要がある。そのため、教科等の内容について、「カリキュラム・マネジメント」を通じて相互の関連付けや横断を図り、必要な教育内容を組織的に配列し、各教科等の内容と教育課程全体とを往還させるとともに、人材や予算、時間、情報、教育内容といった必要な資源を再配分することが求められる。

「教育課程部会 言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」⁽²⁾（以下「審議の取りまとめ」）では、以下のように述べられています。

(3) 言語能力の向上のための、「国語科」と「外国語活動・外国語科」の連携について
(連携の意義、目的)

- 前述(2)のとおり、両教科等の目標は、ともに「言語能力を構成する資質・能力」を育成することを目標とするため、学習の対象となる言語は異なるが、共通する指導内容や指導方法等を扱う場面がある。
- このため、学習指導要領等に示す指導内容を適切に連携させたり、各学校において指導内容や指導方法等を適切に連携させたりすることにより相乗効果生まれ、それぞれの教科等における学習が一層充実し、言語能力の向上が図られると考えられる。本特別チームにおいても以下のような効果が期待されると指摘された。

次期学習指導要領で重視されている教科横断的な学習という視点からいうと、本研究は、『国語科』と『外国語活動・外国語科』の連携を意識した研究です。本研究では、漢文と英語との教科横断的な学習の一例を示したいと考えています。

「審議の取りまとめ」では国語科と外国語科の連携として「特に、言葉の特徴やきまりに関する理解やそれらを使い分ける技能などの指導において、異なる言語と比較することを通じて、当該言語固有の特徴への気付きを促すことが、言語への関心の高まりや、知識・技能の習得のきっかけ、思考力・判断力・表現力等の育成の助けになるものと考えられる」⁽³⁾とあるので、本研究においても、漢文・英語・日本語を比較することを通じて「当該言語固有の特徴への気付きを促すことが、言語への関心の高まり」につながることを目指しました。

イ 漢文・英語・日本語の語順から

田部井文雄は、返り点の成立について「要するに日本語と違って例えば『述語が目的語・補語の上に来る』ために、訓読の順序を示す符号として、返り点が考案されたということである」⁽⁴⁾と述べています。

前野直彬⁽⁵⁾は以下のように述べています。

日本語で「手を洗う」「顔を洗う」というのを、中国語で表現すれば「洗手」「洗面」となる。意味は同じでも、言葉の順序が違うのである。これを文法的に言えば、日本語は目的語が動詞の上にあるが、中国語では目的語が動詞の下につく、ということになる。

また、「登山」という言葉がある。山に登るだが、「山登」とはいわない。しかし、同じ意味を和語で表現すれば「山登り」となって、やはり「山」が上に来る。この場合の「山」は補語だが、目的語と同様、日本語では動詞の上に、中国語では動詞の下につくのである。

齊藤興哉⁽⁶⁾は以下のように述べています。

④我 与 汝 書。

⑤私はあなたに本を与える。

⑥I give you a book.

④では、「汝与我書」のように「我」と「汝」を交換しても、文として成立する。これは、「あなたは私に本を与える」というように⑤においても同じことが言える。この点から言えば、漢文は日本語と似ている。しかし、活用語（「与える」や付属語「は」「に」「を」）のあるなしの点において日本語とは異なっている。

④と⑥の語順を比較すると、漢文は日本語より英語に近いことが分かる。①～③で漢文と日本との共通点を見たが、動詞・目的語・補語の関係を見た場合、むしろ漢文の語順は英語の語順に近い。しかし、異なる言語である限り、共通点があれば相違点もあることに注意しなければならない。漢文の基本的な構造については、日本語と英語の構造を思い浮かべながら理解していくのがよい。

（下線は引用者による。なお、例文④の「書」、⑥の「a book」は補語ではなく目的語である。）

主語（S）、動詞（V）、目的語（O）、補語（C）とすると、上記の齋藤の例は以下のようになります。

④我（S） 与（V） 汝（O） 書（O）。

→S V O O

（書き下し文…我汝に書を与ふ。）

⑤私は（S） あなたに（O） 本を（C） 与える（V）。

→S O C V

⑥I（S） give（V） you（O） a book（O）。

→S V O O

田部井、前野、齋藤が述べているように、日本語は「S+O/C+V」の語順であり、英語や漢文は「S+V+O+O」の語順です。この点において英語と漢文の語順は同じであるといえます。「動詞・目的語・補語の関係を見た場合、むしろ漢文の語順は英語の語順に近い」との指摘を基に、漢文と英語の教科横断的な学びである本研究を進めました。

ウ 使役表現の語順

本研究の授業実践で用いた教材は「江南橘為江北枳」(『説苑』)です。本教材を選んだ理由は、使役表現が含まれているからです。漢文の句法学習において、多くの場合、再読文字の次に学ぶほど重要視されている使役ですが、その学習の際に英語の使役表現との語順上の共通性を取り上げることはありません。本研究で使役を取り上げたのは、それが句法として重用視されているという点と漢文の語順学習では用いられることが少ないという点からです。

前項アの斉藤に倣い、漢文・英語・日本語における使役表現を以下に並べます。

<p>【漢文】我(S) 使(V) 弟(O) 運鞵(C)。 →S V O C (書き下し文…我弟をして鞵を運ばしむ。)</p> <p>【英語】I(S) have(V) my brother(O) carry my bag(C)。 →S V O C</p> <p>【日本語】私は(S) 弟に(O) 鞵を(C) 運ばせる(V)。 →S O C V</p> <p>※検証授業では使役動詞として「make」「have」「let」の3語を用いました。</p>

	漢文	英語
使役動詞	使	make have let

漢文と英語の語順が似ているということが分かります。漢文と英語では、主語の次に使役動詞として「使」／「make」「have」「let」があり、その次に誰にさせるかという意味で目的語(O)が置かれ、その次に何をさせるかという補語(C)が置かれます。しかし、日本語にはこの語順感覚がないので、「使」の後の処理ができない生徒が多いのです。書き下し文は「我弟をして鞵を運ばしむ。」ですが、「使」を「しむ」と平仮名で書くことはできても、「弟をして」と「をして」を施せなかったり「運ぶ」を未然形にして「運ば」とできなかったりする生徒が多いのは、「使(V) 弟(O) 運鞵(C)」という語順が日本語にないことが一因です。

そうであるからこそ、過去の日本人は「ヲシテ」という送り仮名や返り点を発明して漢文を読もうとしたのです。「漢文を読むことは、中国と日本の言語文化の根本に触れることに他ならない。それは決して若い人々にとって迂遠なことではなく、現代の言葉の状況を揺り動かす大きな可能性を持った行為なのである」⁽⁷⁾との安藤信廣の指摘を忘れないようにしたいところです。

エ 教科横断的な学習

次期学習指導要領では教科横断的な学習が求められています。検証授業を行った高校の英語科担当者に話を伺うと、「使役構文は既に学習しており、今後も復習する内容である。今年度も、コミュニケーション英語Ⅱという科目において教科書『POWER ON』の『LESSON6 The Power of Color』で学習済みである」とのことでした。その学習プリントには以下のような記載がありました。

Round6 Grammar

S + V + O + C [=動詞の原形] : 「OにCさせる」「OにCさせてやる」

S	V [have, let, make]	O	C [動詞の原形]
These colors	make	the customer	imagine the effectiveness of the product.
They	let	me	explain the effects of colors.

1. 兄は自分のコンピューターを私に使わせてくれません。
My brother dosen't (his computer / me / use / let).
2. 息子にあなたの部屋まで鞆を運ばせましょう。
I'll (my son / carry / have)your bag to your room.

英語と漢文の使役構文には語順の共通性があるので、その点を生徒に理解させることで、教科横断的な学習につなげ、言語文化への関心・意欲面の向上を図ろうとしました。検証授業の前段階として短時間であっても英語科担当者から情報や教材を提供していただけたことは、教科横断的な学習活動を行う上で重要であったといえます。

(2) 実践に取り入れた手立て

ア 使役を例とする

漢文を学ぶ際に語順を意識することの重要性については、教師にも生徒にも完全に浸透しているとはいえません。しかも、その語順を教える際に教師が用いているのは、句法が含まれない簡単な文ではないでしょうか。今回は、英語との語順の共通性が明確になり、理解が進んで関心が高まるように、使役を例として用いることとしました。

イ 教科横断的な学習

前述のコミュニケーション英語Ⅱで使用されたプリントを生徒に提示することで、漢文と英語の語順に共通性があることに気付かせることができます。「make」＝「使」だけでなく、目的語と補語の順番に共通性があることにも目を向けさせました。そのためにも、コミュニケーション英語Ⅱの学習プリントをそのまま用いました。

複数の教科の連携となるので指導の時期や順序についても配慮が求められます。「審議の取りまとめ」では、「指導する時期や順序を踏まえた効果的な連携」の例として「共通する資質・能力を育成するための指導内容や指導方法等を、両教科等において同時期に扱ったり、一方の教科で扱った後に、その指導を振り返りながらもう一方の教科で扱ったりするなどして指導を重ねること」⁽⁸⁾とあります。本研究においても、コミュニケーション英語Ⅱの指導で扱った後、古典Bの指導を行いました。その古典Bの指導の際はコミュニケーション英語Ⅱの学習プリントを用いるなど、事前に行われた外国語の指導を意図的に思い出させました。

ウ ワークシートの工夫

対話を行う場合は、その対話の前後で成長つまり変容が見られたかどうか大切です。例えば、

対話の前には気付かなかった目的語と補語の語順に対話を通じて気付くなどの変容が見られるのが理想です。

そのために、個人用ワークシートとグループ用ワークシートを分ける、振り返りの際に対話の前後で思考がどう変容したかを書かせるなどの工夫を行いました。自分の思考の変容や深まりを自覚的に認知させることを目指しました。

エ 佐賀大学教育学部達富洋二教授による意図的なグルーピングの提案

検証授業において対話的な学びを取り入れましたが、その準備段階で佐賀大学教育学部の達富洋二教授より「意図的なグルーピング」について御助言を頂きました。グループのメンバー構成・人数等についての提案や事前アンケート用紙（質問紙）の例を以下に載せました。

佐賀大学教育学部達富教授による「意図的なグルーピング」の提案

○メンバー構成（3人グループ）

3人グループの役割	ひとがら	必要な資質
リーダー	みんなの前に立てる。 発表することを嫌がらない。 おしゃべりが好き。	技能性
アイデア提供者	発表内容の原案を示すことができる。 グループの思考過程の中心になれる。 満足できる学習状況である。	思考性
ファシリテーター	対話を進めることが得意。 コミュニケーションが好き。 中立的な立場。 みんなのために何とかしようとする。	社会性

対話における役割は上記の3つに分類できるので、その役割にふさわしいひとがらの生徒を3人のグループにして構成すると、対話が促進される可能性が高まります。

特に、3人目のファシリテーターを1グループに1人配置することが重要です。対話的な学びを促進したいのであれば、各グループにもれなくファシリテーターを配置すると効果的です。

○グループの人数

上記のメンバー構成を成立させるには、グループの人数は3人が適当です。グループではいろいろな役割が考えられますが、上記の役割を3人で行うことから始めてみてはどうでしょうか。2人で行うペアワークが有効な場面もあるでしょうが、話が広がりにくいことがあります。多面的に考えることも難しいです。また、対話の力を付けるための役割を習熟する機会も少ないです。役割を大きく3つに分けて行うことは生徒にも理解しやすいようです。

次に示すのはグルーピングするために、その生徒がファシリテーターとしての資質を持っているかどうかを調べる事前アンケートの例です。御活用ください。

事前アンケートの例

1 今、あなたは3人グループで、熊本地震で困っている方々にどんなことができるのだろうか、という話し合いをしています。

Aさんは、司会です。Aさんは、Bさんに「どんなことができるか、意見を教えてください」と聞きました。しかし、Bさんはとても困った顔でだまりこんでしまいました。それを見ていたあなたは、どうしますか？

- ① かわりに自分の考えを答える。
- ② 「答えになりそうなアイデア」を小さな声でアドバイスをする。
- ③ 「黒板を見て考えてみたら」とアドバイスをする。
- ④ 何かしてあげたいけど、何をしてよいか分からないと思う。
- ⑤ その他【 】

2 あなたは、学級会でクラスの目標について話し合っています。でも、なかなかよいアイデアが思いつきません。そんなときに、となりの友達が、とてもよい目標を思いついて教えてくれました。その後、あなたならどうしますか？

- ① 友達の目標はよいものだから、自分の意見にする。
- ② その友達の目標を参考にして、少し言葉をかえてみる。
- ③ その友達の目標を参考にするが、自分の意見は新たに考えてみる。
- ④ どうにかしたいけど、自分の意見をもてないと思う。
- ⑤ その他【 】

今回の検証授業では、時間の都合で上記のアンケートをそのまま用いて役割の異なる3人を1組にすることまではできませんでしたが、達富教授の助言を参考に簡易な事前アンケートを実施し、3人の中に最低でも1人はファシリテーターの役割を担うことができる生徒が入るように意図的にグルーピングしました。各グループに最低でも1人はファシリテーターが入るようにグルーピングすることで、各グループの対話が促進され、教科横断的な学習が深まることを期待しました。

(3) 実践事例

ア 指導計画

1 単元名 漢文・英語・日本語の語順を比較してみよう

2 単元について

(1) 教材観

本教材は、使役の句法を含む文章である。今回の単元の目標が、知識・理解を中心としたものなので、その目標が実現できるように使役の句法が含まれている本教材を選択した。本教材には使役が3回も用いられており、その難易度には違いがあるため、より学習も深まるのではないかと思われる。

しかも、その使役が用いられている部分は、本教材の内容面においても構成・展開面においても重要な部分である。「江南」「江北」「橘」「枳」の比喩は何を示しているのかという本教材の主題の読み取りに関わる部分で使役が用いられており、「知識・理解」と「読む能力」のつながりが分かりやすい教材であるといえる。

(2) 指導観

漢文を苦手とする生徒の多くは句法を覚えることに対する消極的な気持ちをもっていることが多いので、今回は、機械的な句法の暗記ではなく漢文・英語・日本語の語順を比較する対話的な活動を行うことで、その消極的な気持ちを少しでも払拭できればと考えた。使役を例にとり漢文・英語・日本語の語順を比較することで、漢文学習において重要となる語順意識や言語文化についての関心の高まりにつながることを期待した。

使役は、英語においても学習する内容であり、本校においても本年度「コミュニケーション英語Ⅱ」という科目において『POWER ON』という教科書の『LESSON6 The Power of Color』で学習済みである。漢文・英語・日本語の使役を比較するこの単元が教科横断的学習の試みになればと考えた。

3 単元の目標

- ・ 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解しようとしている。
- ・ 古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確に捉える。

(「古典B」内容(1)のイ)

- ・ 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解する。

(「古典B」内容(1)のア)

4 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解しようとしている。	古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確に捉えている。 (「古典B」内容(1)のイ)	古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解している。 (「古典B」の内容(1)のア)

5 言語活動

辞書などを用いて漢文・英語・日本語の文の構造を比較し、分かったことについて話し合うこと。

6 教材

「江南橋為江北枳」（『説苑』）（数研出版『古典B漢文編』）

7 単元の指導計画（全2時間）

次	主な学習活動	評価規準（方法）
1次	単元の目標を理解する。 使役の句法を復習しながら予習で記入した書き下し文と大意が適切であったかを確認することで、大意の読み取りに使役を用いた比喻表現が関わっていることを理解する。	古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確に捉えている。（ノートの記述）
2次	使役を例に、漢文・英語・日本語の語順を比較し、相違点や共通点について話し合い、その内容をワークシートに記入する。	古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解しようとしている。（ワークシートの記述） 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解している。（ワークシートの記述）

イ 授業の実際

（1／2時）

○目標

予習してきた書き下し文と大意を基にペアワークを行うことで、使役や比喻表現に即して正しい大意を捉える。

○展開

	学習活動	教師の働き掛け	評価規準
導入	1 本時の目標を確認する。	・この單元では、語順を視点にした漢文・英語・日本語の比較という普段とは違う内容を行うことを伝えた。	
展開	2 予習してきた書き下し文が正しいか、答え合わせをする。		

	<p>3 予習してきた大意が正しいかペアで話し合う。</p> <p>4 幾つかのグループが話し合った大意を発表する。</p> <p>5 音読する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大意を捉える際に、使役や比喩が多用されている部分の読み取りが重要であることに気付かせた。 ・生徒だけで大意にたどりつくように、対話を取り入れて多くのペアに発表させた。 	<p>【読む能力】</p> <p>「荊王が策を弄して晏子を陥れようとしたが、晏子はその策を利用して、逆に荊王をやり込めた」という大意がノートに書けている。 (ノートの記述)</p>
まとめ	<p>6 本時の振り返りをする。</p> <p>7 次時の学習内容を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・次時は使役を用いた語順の学習を確認した。 	

(2/2時)

○目標

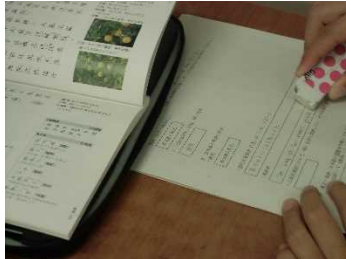
本文に用いられている使役の文構造を理解し、漢文・英語・日本語の語順の共通点や相違点を理解する。

○展開

	学習活動	教師の働き掛け	評価規準
導入	<p>1 音読する。</p> <p>2 本時の目標を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・使役が用いられている部分の音読は繰り返させた。 ・漢文・英語・日本語の語順を比較するという、普段とは異なる内容の学習を行うことを伝えた。 	
展開	<p>3 使役を用いた文を取り上げて、その文を日本語訳する。</p> <p>4 上記の日本語訳を英訳する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション英語Ⅱの授業で用いられたプリント等のコピーを用いることで、他教科とのつながりを意識させた。 	



学習用PC内の英和辞典を利用した。



使役を含む漢文の日本語訳と英訳を記入した。

5 漢文・英語・日本語の語順を比較し、分かったことや気付いたことをワークシートに書く。(個人)

6 グループに分かれ、分かったことや気付いたことについて意見を交換する。
(3人組。教室スペースの都合で横並びで話し合った。)



7 幾つかのグループが発表する。

・漢文の「使」
=英語の使役動詞「make」
漢=英：S + V + O + C
日本語：S + O / C + V

・使役の例に基づいた意見交換になるよう促した。
・自分以外の意見はワークシートにメモするよう伝えた。
・対話の前後での変容を自覚させた。
・事前アンケートにより1グループに必ず1人はファシリテーターが存在するよう意図的にグルーピングした。


【知識・理解】

文の構造を理解し、以下の内容をワークシートに書いている。

- ・英語の使役動詞(V) 「make」が漢文の「使」に当たること。
- ・漢=英 S + V + O + C
- ・日本語 S + O / C + V (ワークシートの記述)

【関心・意欲・態度】

文の構造を理解し上記の内容をワークシートに書こうとしている。(ワークシートの記述)

		<p>・電子黒板に生徒の発表内容をまとめて提示した。日本語訳をS V O Cに分けた場合、V Cは「取らせた」「これを」と「せた」「これを取らせた」の2つが見られたので、2つとも提示した（写真は前者を採用）。日本語の特徴として、使役を表す際に使役動詞ではなく使役の助動詞を用いる、少なくとも英語や漢文のような使役動詞は存在しないのではないか、という深い理解にたどりつこうとしている生徒もいた。</p>																					
																							
		<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>S (主語)</th> <th>V (動詞)</th> <th>O (目的語)</th> <th>C (補語)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>英語</td> <td>The King of Sei</td> <td><u>made</u></td> <td>his men</td> <td>take this</td> </tr> <tr> <td>漢文</td> <td>齊王</td> <td>使</td> <td>人</td> <td>取之</td> </tr> <tr> <td>日本語</td> <td>齊の王は</td> <td><u>せた</u> (取らせた)</td> <td>家臣に</td> <td>これを取ら (これを)</td> </tr> </tbody> </table>		S (主語)	V (動詞)	O (目的語)	C (補語)	英語	The King of Sei	<u>made</u>	his men	take this	漢文	齊王	使	人	取之	日本語	齊の王は	<u>せた</u> (取らせた)	家臣に	これを取ら (これを)	
	S (主語)	V (動詞)	O (目的語)	C (補語)																			
英語	The King of Sei	<u>made</u>	his men	take this																			
漢文	齊王	使	人	取之																			
日本語	齊の王は	<u>せた</u> (取らせた)	家臣に	これを取ら (これを)																			
<p>まとめ</p>	<p>8 単元の振り返りをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標は文の構造の理解であったことを再度伝え、その視点で振り返らせた。 ・自分の考えが対話によってどう変容したのか深まったのかをワークシートに書かせることで自覚的に振り返らせた。 ・個人でしっかりと考えさせるため、十分な時間を取った。 																					

ウ ワークシート

【ワークシート1：グループワーク前】2年（ ）組（ ）号 氏名（ ）

○次の例文を用いて、漢文・英語・日本語を比較し、そこから何が分かるか考えてみよう。

例文（白文＝訓点なし）

齊王使人取之。

1 句法は何か、記せ。例：受身

--

2 日本語と英語に訳せ。

・漢文

齊王使人取之。

・現代日本語訳

--

・英語訳

--

・上記英語訳において「使」を何と英訳したか、英単語1語で記せ。

--

3 漢文・英語・日本語の語順を比較してみて気付いたことや分かったことを記せ。

S（主語）・V（動詞）・O（目的語）・C（補語）を使いながら書いてみよう。

--

4 時間が余った生徒は、語順以外で何か、漢文・英語・日本語を比較してみて気づいたことやわかったこと、考えたことを書きなさい。

--

【ワークシート2：グループワーク中(メモ)】2年()組()号 氏名()

○話し合いながら、クラスメイトの意見で参考になるところをメモしなさい。

1 日本語と英語に訳せ。

・漢文

例文(白文=訓点なし)

齊王使人取之。

・現代日本語訳

・英語訳

・上記英語訳において「使」を何と英訳したか、その訳語を記せ。

2 漢文・英語・日本語の語順を比較してみて気付いたことや分かったことを記せ。

S・V・O・Cもしくは主語・述語・目的語・補語を使いながら書いてみよう。

3 語順以外で何か、漢文・英語・日本語を比較してみて気付いたことや分かったこと、考えたことを書きなさい。

【ワークシート3：グループワーク後】 2年（ ）組（ ）号 氏名（ ）

1 話し合う前と後を比較し、自分の考えが変化したり深まったりしたことがあれば、その過程を書きなさい。自分の考えを無理に変化させなければならないというわけではない。変化しなくても、対話することで自分の考えが明確になったり深まったりしていたら、その深まった過程を具体的に書きなさい。

例「話し合う前は～～と考えていたが、話し合うことで、―――という視点から見ると・・・
という考え方もあることが分かった。……………」

【補助教材】 2年（ ）組（ ）号 氏名（ ）

英語の先生にお願いして、コミュニケーション英語Ⅱ『POWER ON』「LESSON6 The Power of Color」の授業で配布された学習プリントから抜粋したので、語順を比較する際に参照しよう。

コミュニケーション英語Ⅱの教科書『POWER ON』
「LESSON6 The Power of Color」からの本文引用

Round6 Grammar

S + V + O + C [=動詞の原形] : 「OにCさせる」「OにCさせてやる」

S	V [=have, let, make]	O	C [=動詞の原形]
These colors	make	the customer	imagine the effectiveness of the product.
They	let	me	explain the effects of colors.

1. 兄は自分のコンピューターを私に使わせてくれません。
My brother dosen't (his computer / me / use / let).
2. 息子にあなたの部屋まで鞆を運ばせましょう。
I'll (my son / carry / have)your bag to your room.

エ 検証授業で用いた漢文教材と英語教材の共通点

検証授業で用いた『古典B漢文編』「江南橘為江北枳」（『説苑』）と『POWER ON』「LESSON6 The Power of Color」との共通点は以下のとおりです。

教科 科目	国語 古典B（漢文）	外国語 コミュニケーション英語Ⅱ
教科書 教材	数研出版『古典B漢文編』 「江南橘為江北枳」（『説苑』）	東京書籍『POWER ON』 「LESSON6 The Power of Color」
共通点 （長所）	<ul style="list-style-type: none"> ・使役表現が複数回使われている。 ・使役表現を含む文が本文全体の主旨と深く関わっている。 ・教科書教材である。 	

この2つの教科書教材に存在する使役表現をS V O Cに分けると以下のようになります。

S	V	O	C
There colors	make	the customer	imagine the effectiveness of the product.
Pink and yellow	make	the students	feel happy.
It	will make	you	feel calm.
Too much blue	may make	you	feel too calm、 or even depressed.
They	let	me	explain the effects of colors.
齊王	使	人	取 之 。
其土地	使	之	然 也。

「LESSON6 The Power of Color」では、学習プリントに引用されている“*There colors make the customer imagine the effectiveness of the product.*”をはじめとする使役表現が主旨と深く関わっており、『古典B漢文編』「江南橘為江北枳」（『説苑』）では、「其土地使之然」という使役表現が繰り返されており、「国の違いが国民の性質を変えさせる」という登場人物の主張となっています。句法・文法の共通性のみならず、その句法・文法が本文中で大きな役割を果たす点も同じです。

今回、検証授業を実施するに当たり、英語科担当者に事前に相談したところ、使役の語順を指導するのに最適な本教材を教えてくださいました。しかも、コミュニケーション英語Ⅱでは既に学習済みということだったので、英語で使用した学習プリントを頂き検証授業でも配布しました。英語の既習内容を振り返ることで漢文の学習が深まることを意図しました。

このように、教科横断的な学習を実践する際は、事前に連携する教科の担当者に相談することが大切です。教材の適性や指導内容の学習状況等について有益な情報交換ができ、指導に生かすことができます。

(4) 考察

ア ワークシート1～3の記述から

個人での学習からグループ活動へという流れの中で、41人中38人の生徒が自分たちだけで**資料1**のような記述にたどりつくことができました。したがって、教科横断的な学習を通して、漢文の語順を理解することができたといえます。

○生徒①

2 漢文・英語・日本語の語順を比較してみて気づいたことやわかったことを記せ。できればS・V・O・Cもしくは主語・述語・目的語・補語を使いながら書いてみよう。

漢文と英語の語順は同じ S V O C 日本語は、S O C V

○生徒②

漢文と英語は S V O C になっている。

日本語は S O C V になっている

○生徒③

漢文と英語の S, V, O, C の順番が同じだと思う。
日本語と、漢文、英語の C (補語) の順番が違う。

○生徒④

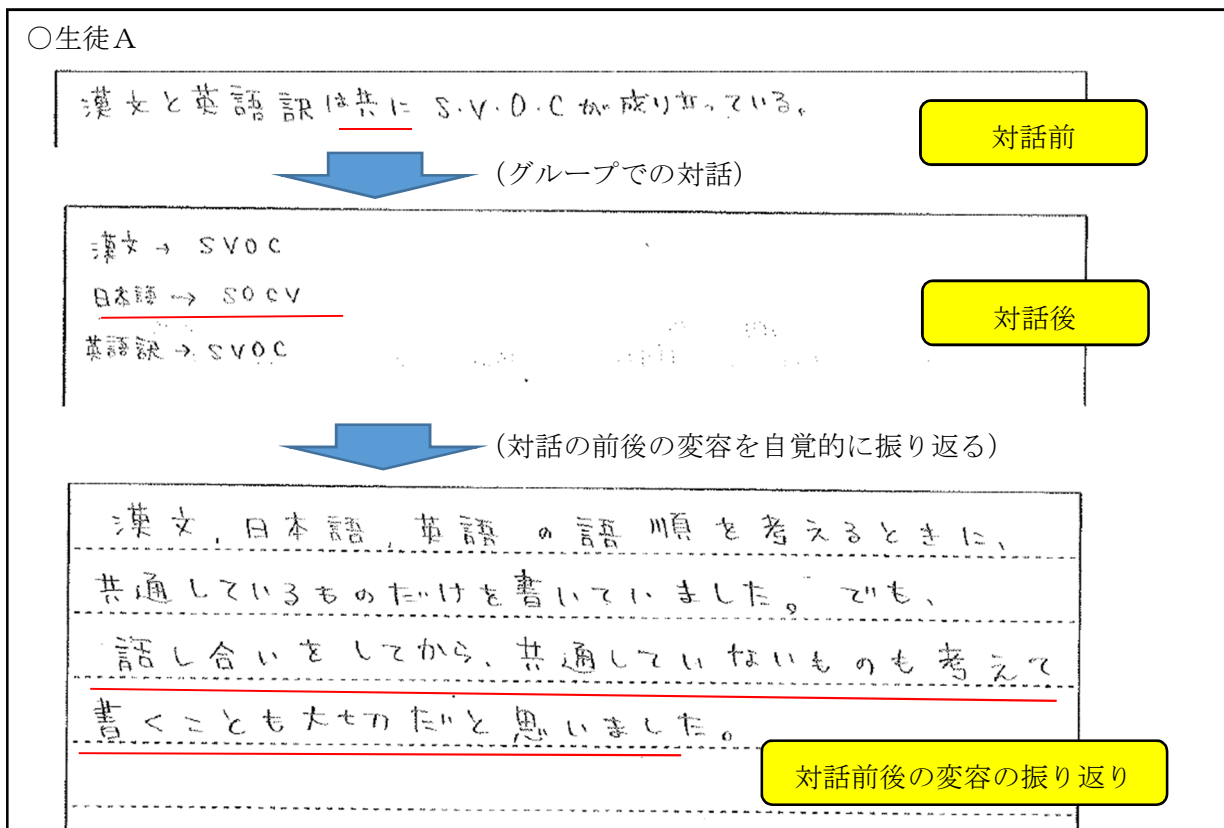
漢文・英語・日本語 どれも S・V・O・C で成り立っている

(S V O C) (S O C V)

資料1 ワークシート1、2の記述

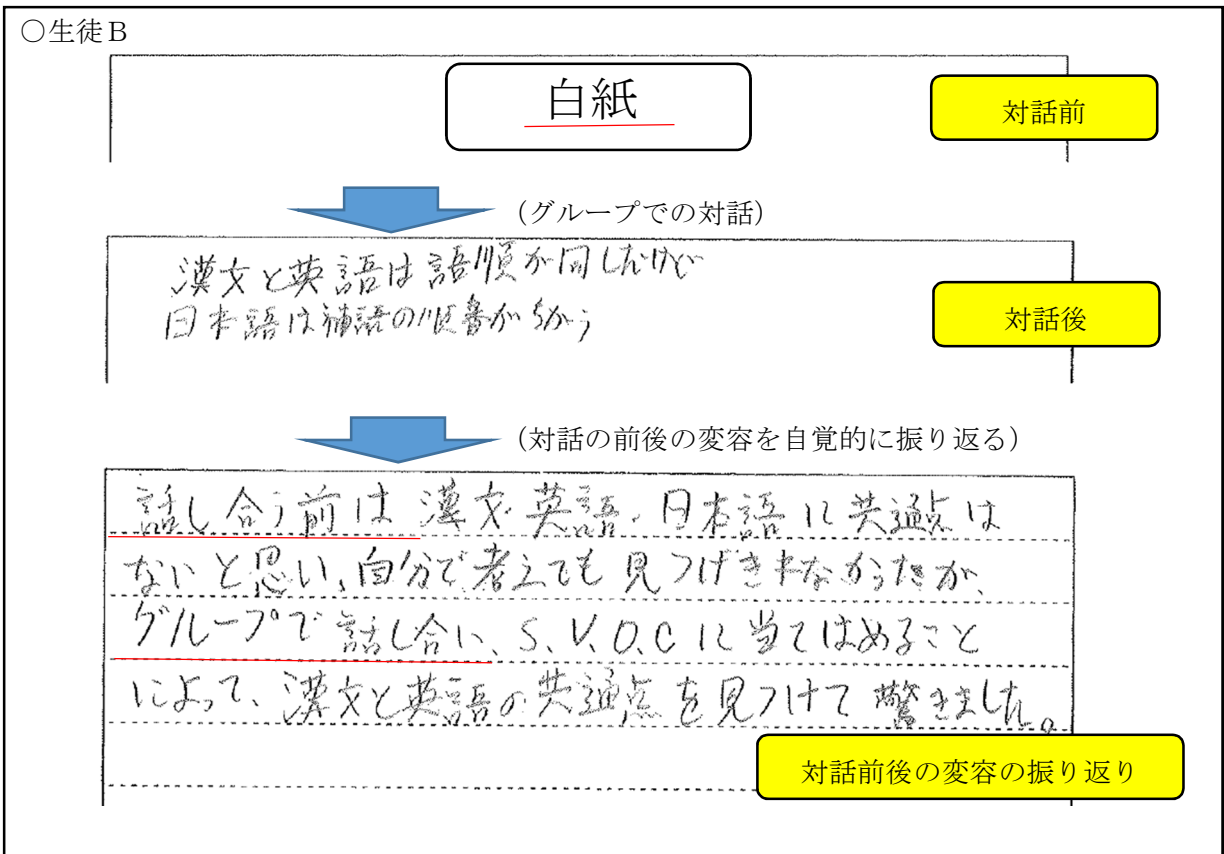
対話の前後で生徒の記述に変容が見られました。対話前のワークシートと対話後のワークシートを並べると、対話によって生徒の理解が深まっていることが分かります。**資料2**、**資料3**、**資料4**、**資料5**は、対話前のワークシート1、対話後のワークシート2、対話の前後の変容を自覚的に振り返ったワークシート3を並べたものです。**資料2**は、個人では共通点だけにしか注目できていなかった生徒が、対話によって相違点にも目を向けることができるようになった例です。**資料3**は、個人では何も書けていなかった生徒が、対話や振り返りを経ることで語順の共通点を理解できた例です。**資料4**は、「S V O C」を用いて記述することができるようになった例です。**資料5**は、使役の助動詞を用いる日本語には英語や漢文のような使役動詞は存在しないのではないかという

深い理解にたどりつこうとしている例です。代表的な例を資料として示しましたが、全生徒 41 人中 32 人の生徒の記述がこのような正の変容を見せました。



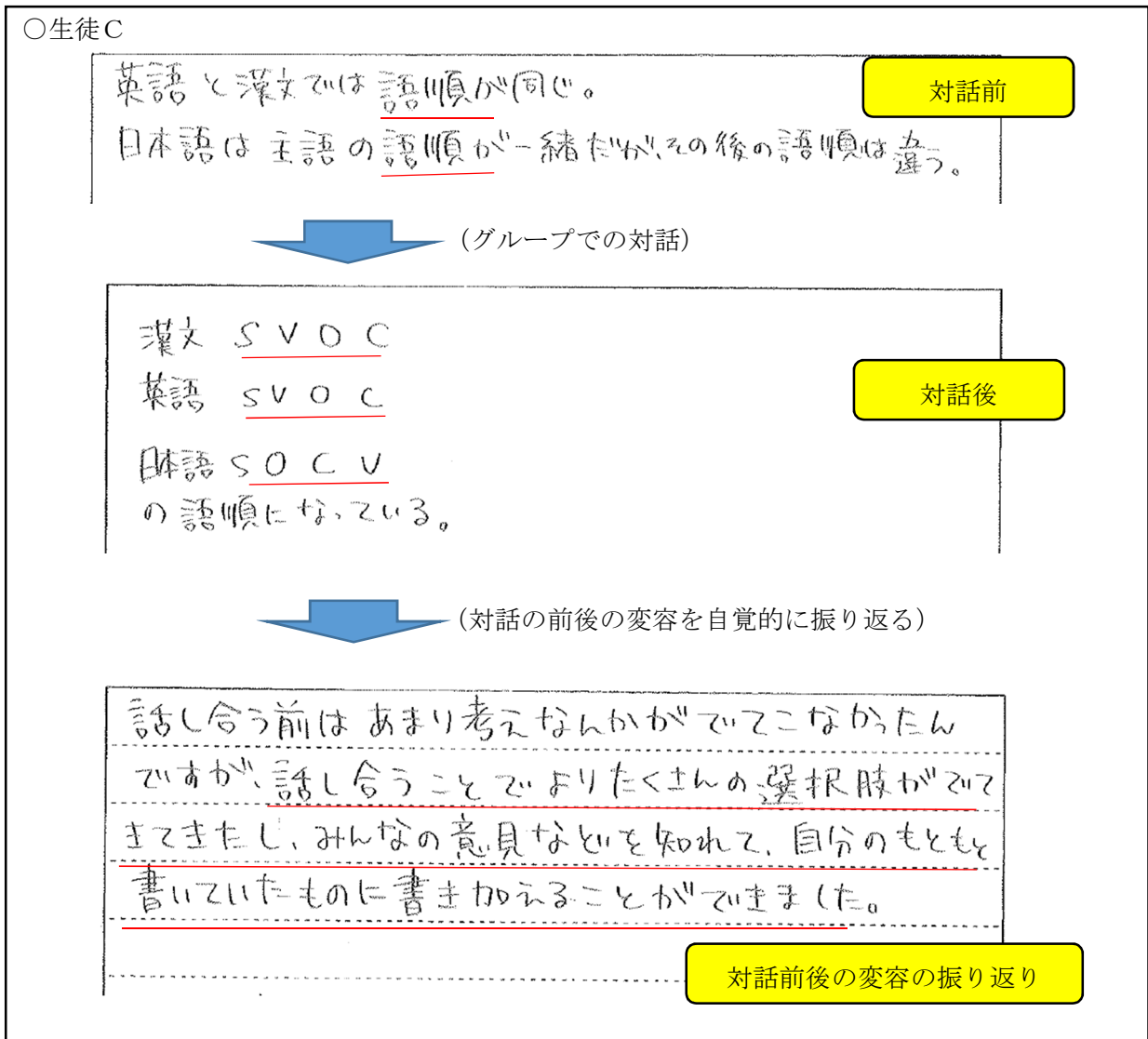
下線や矢印等は筆者による。

資料2 記述の変容1



下線や矢印等は筆者による。

資料3 記述の変容2



下線や矢印等は筆者による。

資料4 記述の変容3

○生徒D

日本語は、S、O、C、Vの順になっている。
漢文は、
 英語は、S、V、O、Cの順になっている

対話前

(グループでの対話)

漢文 S、V、O、C
 英語 S、V、O、C
 日本語 SCOV

対話後

(対話の前後の変容を自覚的に振り返る)

話し合う前は、「漢文と英文の語順が「SVO C」で、
 「日本語訳が「SOCV」だ」ということのみが発見だったが、
それぞれ、VとCに目をつけてみると、英文、漢文では、
V→「させる」 C→「これを取る」と分けることが出来るが、
日本語訳は V→「取らせる」 C→「これを」となり、
使役動詞のみで、分けることは難しいことに気がいた。

対話前後の変容の振り返り

下線や矢印等は筆者による。

資料5 記述の変容4

イ アンケート結果から

今回、96%の生徒が英語を取り入れ教科横断的な学習を行ったことで漢文の語順についての理解が深まったと答えています（図1）。アンケートの1項目として出題した確認問題においても高い正答率を示しました（図2）。

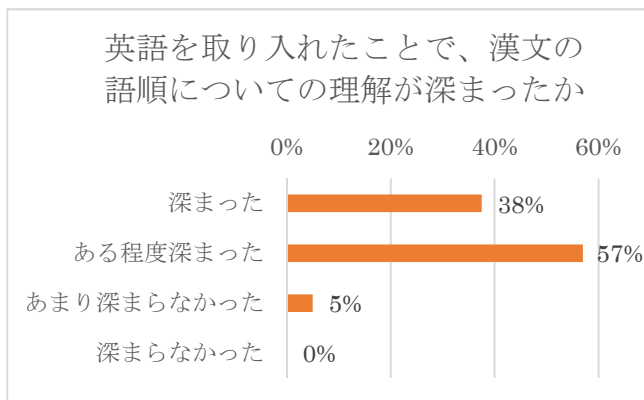


図1 英語を取り入れた効果

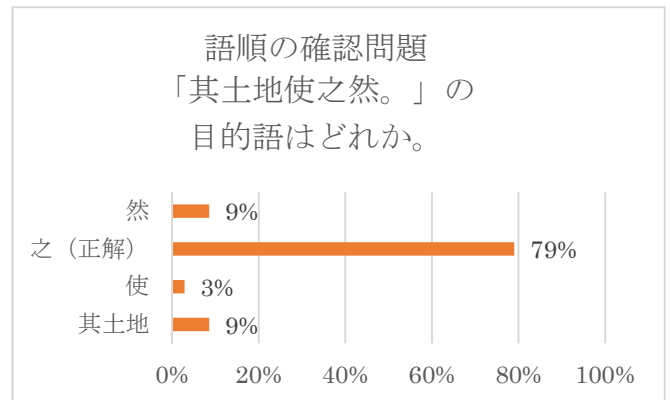


図2 確認問題

次に、漢文の語順を理解できたかどうかとその理由を調査しました。教科横断的な学習だけでなく対話やワークシートも理解に役立ったようです（図3、図4）。

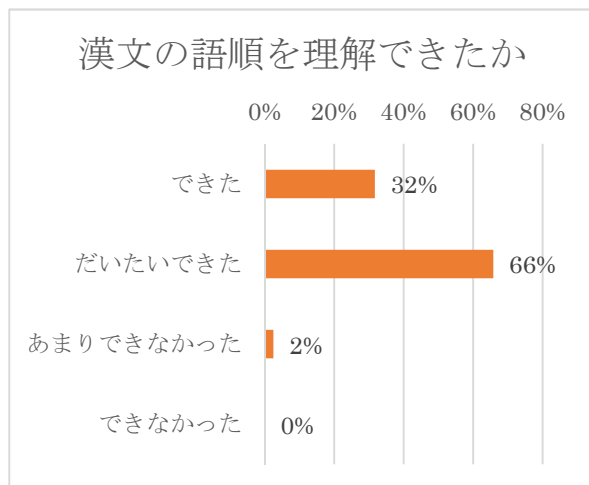


図3 語順の理解

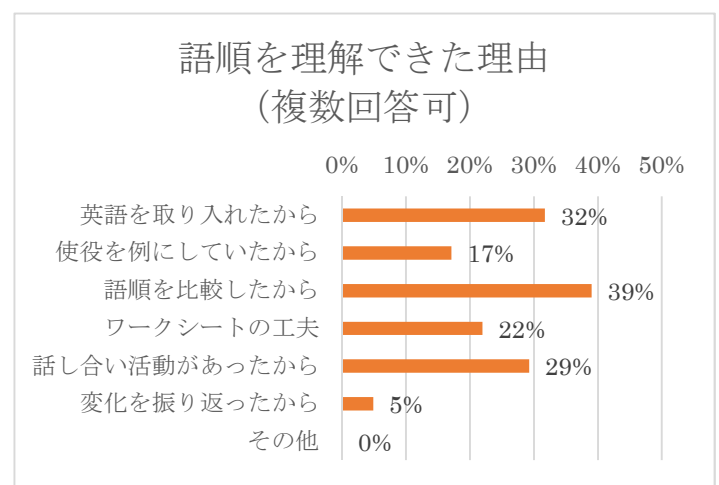


図4 語順を理解できた理由

理解だけでなく関心が高まったかという意欲の面においても調査が必要であると考えました。教科横断的な学びを中心とした複数の手立てが、高い関心を導き出したといえます（図5、図6）。

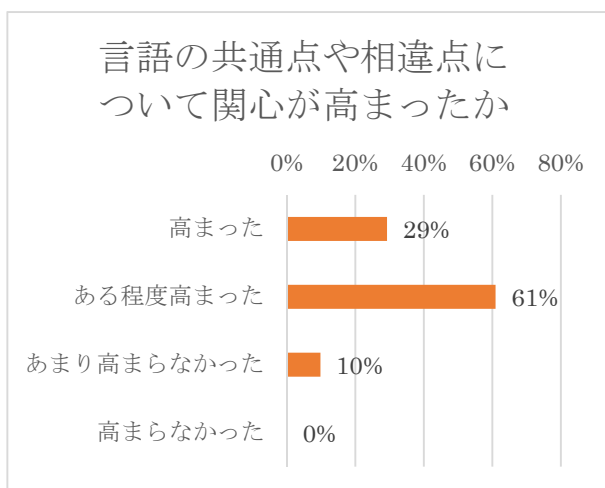


図5 言語についての関心

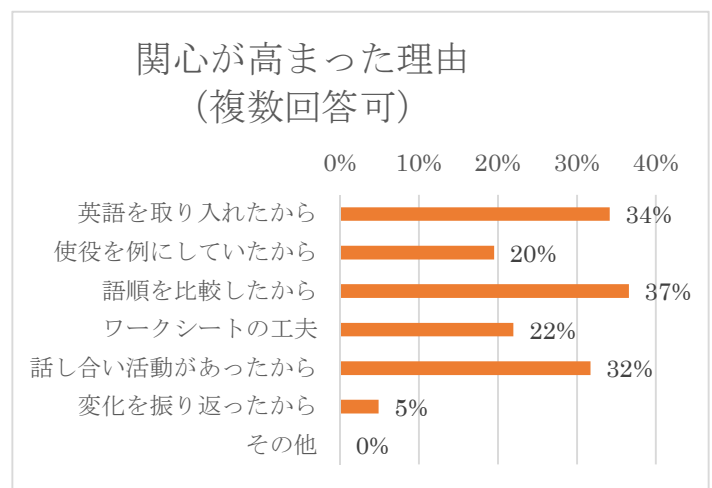


図6 関心が高まった理由

《引用文献》

- (1) 文部科学省 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」 平成28年8月 p. 22
- (2) 文部科学省 「教育課程部会 言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」 平成28年8月26日 p. 13
- (3) 文部科学省 「教育課程部会 言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」 平成28年8月26日 p. 14
- (4) 田部井 文雄編著 『漢文教育の諸相』 平成17年12月 大修館書店 p. 28
- (5) 前野 直彬 『漢文入門』 平成27年12月 筑摩書房 p. 86
- (6) 斉藤 興哉 『漢文必携』 平成5年1月 京都書房 p. 7
- (7) 田部井 文雄編著 『漢文教育の諸相』 平成17年12月 大修館書店 p. 39
- (8) 文部科学省 「教育課程部会 言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」 平成28年8月26日 p. 16